

「余 暇」の 展 望

—— 労 働 と 余 暇 の 関 係 ——

嘉 野 優

A 余暇観念の歴史的推移

(一)

余暇(Leisure)という言葉の意味を、オックスフォード辞典でみると、凡そ次のようである。——人が随意に使える時間をもつ状態。欲するままに、消費できる時間。もう少し意味が限定されると、仕事や職業から解放され自由になること、によって与えられる機会。特殊の意味ではなんらなすことのないヒマの時間をいうが、こんにちではこの意味はまれである、と。(1) さらにセリグマンの社会科学辞典によると——社会的分析の立場からする余暇の概念は、生計を維持することにかかわる諸活動から、解放されることをまづ意味すると、いう。(2) 余暇が仕事、職業や生計という事柄と関連するものであることはほぼこれらに共通している、といつてよい。ここでとりあげようとする余暇も、仕事や職業などとよばれる「労働」と関係してくる。こういうてんから余暇を、基本的には生計を営むのに相応な生活費をうるために、労働をして、そのあとに残る時間、と一応規定しておく。であるから、たとえば失業や半失業又は不完全就業などの状態から結果する残余時間は、ここでいう余暇には、そのままあてはまらない。なお、先にあげたオックスフォード辞典によれば、余暇に——はっきりと、又は暗に定められたある何かをなす自由或いは機会、という意味があることを付け加えておく。余暇に、こういう或る種の積極的な意味があるということは、あとに述べる事柄とも関係してくるようでもあって、暗示的である。

○

形式的な語義はとも角として、余暇の観念には、歴史的な移り変りがあることに気付く。余暇の内容規定は遠くギリシャにまで溯ることができる。たとえばアリストテレスによれば、「人生の目的を表示するものとして、そこには三つの理想がある。理論にもとづく知恵(theoretical wisdom)、幸福、それに余暇である。余暇は、他の二つを獲得達成する条件以上のものであり、それはすべての私心を全く離れて、事物をとらえようと

する関心から招来される満足、をあらわすものであり、人生の窮局の目的である事物の会得を表示するものである」としている。(3) こういう立場は、praxis に対する theoria の立場とみていいわけで、従てここの「余暇」はすぐれて「静的」な様相をおびている。そして、古代ギリシャにおけるこうした余暇観念の、西欧文化へのある種の影響は、たとえば英語の school ということばが、ギリシャ語の scholē (=自由時間、ゆとり→leisure) に由来していると、いわれることにも示されていると思う。(4) とにかく school が leisure と共通の源から発しているということは、それが余暇観念の古典的な意義に由来するものであることを示している。ただし、つぎにふれるように、これらの古代哲学者達は、当時の非特権者達にかかわる諸問題には、まだ気付かない。かれらは労働や、報酬をうるための仕事から解放されていた、ポリスの特権的自由市民の問題にのみ、かかわっていたことはいうまでもない。

さてそこで、労働と余暇の関係の歴史を、かりに図式的に示すならば、まづはじめに原始共同体における、この二つの未分化と不分離の段階が考えられる。つまり、そこでは労働的行為が、同時に「あそび」「たのしみ」であるといった、一種の不即不離の状態である。階級分化も職業分化もないこの階段では、人々はほぼ同質的な労働にひとしく従来したが、この労働領域で彼等は同時に、生活の充実感を味ったのである。つまり、人間に内在する行動傾向としての「活動への欲求」が、この領域で充分満たされ、その満足感を内心で経験することができた、と考えられる。つづく奴隷制社会は、支配と被支配の出現の時期であり、かつて凡ての人々が共有していた、いわば始源的な「たのしみ」「あそび」や「ヒマ」は奪われて、それらは支配者や上層階級の手許にだけ配分される。それ以来、こうした分裂がつついていく。さきにのべた、古代的な「閑暇階級」が出現してくる。古代ギリシャでは、自由時間としての閑暇が、「目的それ自体」となったことは、すでにふれた通りである。(5)

つぎの農奴制社会になっても、生産力がまだ極めて低く、農奴が拘束的身分であったなどのために、彼らの「労働」したがって彼らの「余暇」の問題は、社会的に提起されるべくもない。ただ僧侶などをはじめとする上層社会にあっては、しだいにこの時代特有の余暇観念が、生じたように思われる。たとえば、聖オウグスチヌスにみられる激しい現世否定の精神。あるいは、T. アクイナス(1225-74)が「自分の生涯を瞑想の生活に捧げる人々があつてしかるべきである」(6)というとき、そこには余暇の中世的キリスト教的な考え方があらわれていると思う。(7)

けれども、同じキリスト教でも、のちにやがておこってくるカルヴィニズム、或いはM. ウェーバーのいう禁欲のプロテスタンティズムの諸宗派がはたした役割は、周知のとおりそれが資本主義の胎動期と結びつくことによって、特異なものとなる。つまり中世キリスト教時代特有の——というのは古代ギリシャ時代の、明るい、現世肯定的なそれとは対照的な——あの「静寂」で「瞑想的」な余暇観念は、中世の停滞的な経済とともに、しだいに消えていく。久しく賤しいものとされた金銭的、実務的な職業や労働に専心することが、神の思召しに添うゆえんであり、またその労働の成果をいたずらに快楽的消費にあてることは、神の意志にきびしく背くものである——という労働と禁欲のプロテスタンティズムの倫理は中世的な労働観から人々を解放する。人生とは真面目なビジネスであると考えて、労働と勤儉をといたB. フランクリンなどのピュリタニズムも、この倫理的宗派にぞくするが、ピュリタニズムが古いヨーロッパよりも新天地のアメリカ大陸に、そのよき土壌をみいだすのは、少し後になってからである。

要するにプロテスタンティズムの中心内容は、(イ) 決して己の欲望のためでなく「神の栄光を増す」ために、労働と営利に専心すること。(ロ) 労働と営利への専心はしかしながら合理的禁欲的生活態度を、あくまで前提とするものであること。(ハ) したがって個人的快楽や欲望のためにする消費は、厳しく禁ぜらねばならぬこと、にある。このような宗教的、道徳的なきびしい立場を背景にして、はじめて積極的に肯定された営利促進であったのであるが、資本主義の発展過程において、この背景はウェーバーが言うように、しだいに忘れ去られ振り棄てられていく。そして、ただ「自由なる」営利活動の専制だけが、あとに残される。彼は言っている。「禁欲は世俗を改造し、世俗の内部で成果をあげようと試みたが、そのために世俗の外物はかつて歴史にその比を見ないほど強力となり、ついには逃れえない力を人間の上に揮うにいたった。今日では禁欲の精神は——最終的に否か、

誰も知らない——この外枠から抜けでてしまっている。ともかく勝利をとげた資本主義は、機械の基礎の上に立って以来、この支柱をもう必要としない」と。(8) 背景をふりすてて、勝利をとげていく資本主義の発展過程そのものは、新興のブルジョアジーに、余暇と余暇観念をもたらしていくことになる。そして、この余暇観念の基調がそれ以前の古代的または中世的な余暇観念とは、趣きを異にするものであることはいうまでもなからう。

とにかく、久しく非特権的な一般民衆からは遠ざけられてきた余暇の問題が、資本主義的生産、交易の運動とともに、彼らの手許に近づいてくる。もちろんそれは、ブルジョアジーを中心にしてであり、農民でなく都市市民を中心にしなからである。こういう動きの先駆をなすのが、中世末期ごろの自由都市であるだろう。そして、マニファクチュアー時代をすぎ、初期資本主義に入つて漸く、「労働」時間の問題、したがってそれからの解放としての「余暇」の問題が、はじめて萌芽的なかたちで、社会的に提起されてくるようになる。

(註)

1. The oxford Dictionary vol.Ⅵ P.192
2. Seligman : Encyclopedia of the Social Sciences vol.9-10 P.402
3. Ibid. P.403
4. Ibid. P.403
5. わがくにの平安時代の朝廷貴族達が享受した余暇も、これに似たものではなかったろうか。
6. Josef Pieper ; Leisure—the Basis of culture P.28
7. これら中世的余暇思想の源流は、おそらく聖書に発するものであろう。マタイ伝六章のあの美しい「山上の垂垂」をながれる、深い contemplation の思想につながるものであろうか。
8. Max Weber : Die Protestantische Ethik und Der Geist des Kapitalismus 梶山・大塚共訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」岩波文庫 下巻 P.246

(二)

中世時代に生産的労働に従事したのは、農奴や手工業者、或いは親方のもとでの職人、徒弟であった。これらの人達の労働時間は、のちの産業革命期の工場労働者のようには決して長くなく(職人、徒弟は1日8時間位の労働が普通だったろう、といわれたりする)労働そのものも、まだ牧歌的であった。ところが初期産業資本の段階にいと、様子が変わってくる。「労働時間」の問題がはじめて、社会的に提起されてくる。資本の源初的

蓄積期には、労働時間の短縮でなく、却てその延長という事態が、労働者の前にあらわれる。産業革命と歩調をともにする近世機械工業の発展は、社会政策史的にみて、賃労働者にさまざまな重大影響を及ぼすが、労働時間の延長などは、その重要な一例である。労働時間を短縮すべきはずの機械の登場が、却てこれを延長せしめるのである。その理由は、資本主義の「魂」のあらわれだといってしまえばそれまでだが、とにかく当時の労資の力関係の極度のアンバランス、自己所有の機械が競争場裡から落伍することの不安、機械に投じた資本をできるだけ早く回収しようとする企業家の欲求などによるものであったろう。1851年の夏ごろ、イングランド、スコットランドの紡績工場を視察したロバート、オーエンは、例外でなく一般に10才位の子供達が、1日14時間（昼食30分の休みを含む）を定期的に働らかされているのを見た、と報告している。大体労働時間の歴史的推移は、欧米では初期資本主義時代を、10時間～12時間の見当とすれば、産業革命期以降はほぼ13時間～16時間となり、19世紀末には凡そ12時間台に戻る、というふうにみられている。

さて、その19世紀末から20世紀にかけて、資本は独占段階へと入っていくが、これ以降「労働」と「余暇」はその矛盾的な様相を、一層露はなかつちで示しはじめる。この頃の様相を、ヴェブレンの「有閑階級の理論」を通してみてみよう。彼はこの著書によって、資本主義文化ことに世紀末のアメリカ文化の特質を批判したといわれるが、彼のいう有閑階級（Leisure Class）とは、諸種の非生産的職業に従事するものの上層階級をさしているようである。そしてその「有閑」という語は、時間と労力の非生産的かつ衛示的消費（conspicuous consumption）もしくは浪費を意味している。この衛示的消費は、小数の特定個人に対してだけでなく、そのデモンストレーション効果を一層高めるために、不特定多数の人々が動員されたりする。大勢の客を饗宴に招いて、自分の富と消費能力とを誇示するなどは、その一例である。しかもこういう誇示的消費が同時に、また資本蓄積と信用獲得の重要手段となるのである。このようにして金銭的な見栄を中心とする彼の所謂「金銭的文化段階」の完成されたすがたがやってくる。すなわち「有閑階級の制度は、生産的職業に付随する不名誉のおかげで、個人財産権の最初の出現とともに起ったのではなかったとしても、それは常に私有財産制度の初期の結果の一つとして起ったものであろう。したがって、有閑階級は・・・「掠奪文化」の段階から、それにつづく金銭的文化への推移とともに、新しくまた一層十分な意味をもつようになったと言わなければならない。それはこのとき以後、はじめて理論

的にも実際的にも有閑階級となるのである」と。(1)

ところで、第一次大戦をすぎると世界資本主義の中心地は、古いヨーロッパを離れてアメリカに移ってくる。ドルは世界のドルとなり、「永遠の繁栄」ということばが、戦後のアメリカを風靡する。(2) 戦争のもたらした国家的富力、生産設備の更新拡大と生産力の発展を背景にして、かつては上層階級だけのものであったあの「有閑」の時代はひと昔前のものとなり、勤労階級を含めた大衆の「余暇」時代なるものが、史上はじめてアメリカを中心に開幕する。所謂大衆社会の最初の開幕であり、さきに引用したM. ウェーバーの表現をかりれば、「禁欲主義」の精神的支柱をすっかり振り棄て勝利をとげた資本主義文化のすがたが、大衆的な規模で遺憾なく発揮される時期である。1929年の世界恐慌の勃発に先立つこの時期は、すなわち産業合理化の進展、大量生産と商品の規格化の進行、また独占的な企業が直接流通過程をも組織しはじめる時期にあたる。

市民社会に対する大衆社会（Mass Society）という言葉は、産業資本的段階から独占的段階への移行によって、構造的、機能的に変質した資本主義社会の現実社会状況をば、抽象して考える場合に用いられる言葉である。このような社会的状況の転化をもたらした条件について松下圭一氏は次の諸点を指摘している。(3) 資本制内部での生産の社会化を基動因として、(イ) 労働者階級を中核とする人口量のプロレタリア化。(ロ) テクノロジーの進展にともなう大量生産、大量伝達の飛躍的發展。(ハ) 以上二つを基礎として、伝統的社会層別の平準化による人々の政治的平等化。(ニ) は社会的に疎外されてきたプロレタリアートが、労働組合などの自発的結社を媒介にして、歴史の新しい局面に大きな社会的勢力として、登場してくること。他方、この勢力の躍進に対して、支配階級が様々な支配技術を操作して、この勢力を自己の体制内部に編入しようとする——これらの両側面をさす。(四) は交通とマス・メディアの発達による、伝統的な封鎖世界の崩壊という事態、およびこれに伴うW・リップマンの所謂「準環境」、あるいは清水幾太郎の「コピーの世界」の比重の増大ということ。そしてこれらに伴って起ってくる人々の受動的な存在化という事態。(五) は以上の事柄の帰結として、非人格的、官僚的組織の複雑化とその圧倒的な力。政治機構の複雑化と集中化。こういう状況の中からは、パワー・エリートの出現が容易になるとともに、中間階級層を中心とする大衆が、これら巨大機構のカオスを前にして、政治的無力感ないし無関心の様相を示すようになること。——凡そ、このように要約してよかろう。人々は、大衆社会のもとでは、専門人化・部分人化するとともに、他面集団人化し、集団とくにあ

れこれの小集団に逃避する。孤立・断片化し、そしてまた集団情緒化、非合理化していく。これが理性的個人を原理とする市民社会の観念を崩壊せしめた独占段階の特性であって、大衆はこのような状況構造によって、形態づけられる。これがリースマンのいう「孤独な群集」のすがたであり、また彼が「……ここ数世紀の最大の社会的、性格論的な変化は、実に伝統志向型の社会の西欧、中世版へ人間を結びつけていたそもその絆から、人間が解放されたときにおこったのである。すべてそれ以後の変移は、内部志向から他人志向への推移を含めて、それと比べると余り重要でないように思われる」(4)といって、所謂内部志向型から他人志向型への推移にある種の限界をつけているにしても、こういう問題状況もほぼ大衆社会的状況と同じ平面にあるものといってよからう。

こういういわば内的生活態度の脱落、ないしは一種の人格性喪失は、現代においては仕事や労働における人格性喪失だけとは限らない。それは「余暇」の領域にまで滲透していく。パッペンハイムはいう。「仕事の過程以外でのわれわれの思考や生活でさえも、大部分が規格化されている。工場や事務所や店で仕事をしている間は、否応なしにわれわれは人格的な諸性質を押し殺している。しかしそれならば、果してわれわれはそうした人格的性質を表現し、発達させることに、われわれの余暇の時間を使っているだろうか？ 人格的な価値を発達させ、自我の全体性の達成という課題のうちに横っている要求をば、むしろ回避しようとしているのではなからうか？」と反問を投げている。(5) また所謂疎外された人間、疎外された労働については、既にはやくもマルクスがふれているところである。一例をあげよう。「…したがって労働者は労働からはなれた場合に、はじめて自分が自分のもとにあると感じ、労働のなかでは自分の外にあると感じる。……したがって、労働は欲望の充足でなく、労働の外にある欲望を充足するための単なる手段にすぎない。肉体的その他の強制がなくなると、たちまち労働がペストのようにいみ嫌われるというところに、労働の疎外された性格がはっきりと現われる。……人間はただわずかに彼の動物的な諸機能、つまり食うこと、飲むこと、生むことにおいて……自分が自由に活動していることを感ずるにすぎず、彼の人間的な機能においては、もはや動物のようにしか感じない。動物的なものが、人間的なものとなり、人間的なものが動物的なものになる」と。(6)

このようにして労働は、自発的な「たのしみ」や「よろこび」の対極物となり、「よろこび」は労働以外のところ、つまりマルクスのいう「動物的」なところにあるということになる。こういう疎外された労働のもとでは

当然「余暇」自体も疎外されたものとならざるを得ない。そして疎外された「余暇」は一つの欲望主義のとりこととなり、肥大化した消費欲求——受け身の消費志向の性格をおびてくる。「よろこび」と「たのしみ」は労働にではなく、もしそれが見出されるとすれば、それでもって欲望を購入するところの給料袋の中身に見出されるということになる。ついでにここで、独占段階における月賦購入制度なるものを思い浮かべてもよからう。これはいうまでもなく、将来の給料袋の中身、すなわち将来の購買力をもあげて、消費市場に提供する姿にほかならない。このすがたの典型として、たとえば現代アメリカの月賦制度のもたらしたなまなましい断面図や(7) 或いは映画「セールスマンの死」を思いおこすこともできるだろう。

こんにちの「余暇＝レジャー」なるものは、「消費」や「倍增」、「成長」や「ブーム」などの花やかな讃美と歓声のもとで育てられ、つくりあげられたものであって、それが内実を伴うものでなく、侵蝕され空洞化したものであることは、ほぼ知られるとおりである。しかし同時に、その空洞化した余暇の中に、ある種の精神的液体がそそがれつつある。つまりこの余暇のとりことになった大衆の内部には、漠とした内的方向感覚の喪失と、さらに漠とした現状維持的ムードがそそがれ、配給されつつあるということである。このような「讃美」とこの種の「配給」が、いろいろの経路を通過してたえず積みこまれていく。むろん、この余暇のあしもとに、貧困と格差、不均等発展と二重構造などが横っているのはいうまでもない。がとにかく、大衆の余暇は物質的と精神的の二様の意味において、市場の対象となり、大衆はその「労働」のみならず「余暇」においても利潤と訓化の対象となるのである。そして、その余暇消費のしかたは、肥大化した広告宣伝のすがたと方向に似せて、かつ大量化・規格化されながらつくられていく。こういう状況のもとでは、「余暇」と「労働」との分裂、対立矛盾の傾向はいよいよ深くなっていかざるを得ない。

(註)

- (1) T.B. Veblen : The Theory of Leisure Class
1889 小原敬士訳「有閑階級の理論」岩波文庫
P.43~44
- (2) 第一次大戦直後の1919年という年は、ここで随所にふれている「労働時間」問題について、記憶すべき年である。すなわちこの年に、ヴェルサイユ条約で定められたILOの第1回総会が、「工業的企業における労働時間を1日8時間、週48時間に制限する条約」を採択するからである。19世紀末から20世紀にかけて、労働時間は英米でほぼ10時間(1日)、独仏で11時間、さらに第一次大

戦までに主たる資本国の労働時間は約1時間位短縮されるに到ったとみられている。

- (3) 松下圭一「大衆国家の成立とその問題性」『思想』389号 P.31~48
- (4) O. Riesman : The Lonely Crowd 1950
佐々木、鈴木、矢田部訳「孤独なる群衆」P.14
- (5) F. Pappenheim : The Alienation of Modern Man 1959 栗田賢三訳「近代人の疎外」P.40~41
- (6) 「経済哲学草橋」マルクス・エンゲルス選集 補完4 P.303~304 大月書店刊
- (7) 藤井繁一「アメリカの月賦制度」雑誌「世界」1963. 8号 P.131~137

B 余暇意識・余暇消費の諸相とその問題点

(一)

大量消費や余暇の発展を問題にすれば、われわれの関心は当然第三次産業にむけられる。資本主義の上昇期の花形が、第二次産業であったとすれば、こんにちのそれは第三次産業であると言える。それはとにかく、一次二次産業の生産物を「流通」させ、またこれらに「融資」したり、或いは人間生活に必要な「サービス」を提供するなどの役目をもつ第三次産業が、従来のわが国では実質的に潜在失業の吹きだまりであるような零細企業経営を多数かかえていたことは否めない。この状態はある程度、現在もつづいてるとみてよい。しかし他面では、保険、銀行、運輸交通や百貨店などの大企業経営が発展するだけでなく、二次産業までが多種多様のかたちで流通面に進出している。こうして大経営、大企業中心の三次産業の膨張と、その比重の高まりは、こんにちの特徴の一つであるといつてよいが、またこのことは先にあげたこの面での二重構造を同時に拡大させつつあるとみることもできる。

ところで、余暇産業という場合には、それは三次産業と多小範疇を異にしているだろう。三次産業中の余暇、サービス業——運輸交通業、放送出版業、娯楽飲食業 etc.——は当然ふくむとして、このほかにたとえば、自動車・カメラ・スポーツ用具・家庭電化器具などの第二次産業をも、余暇(関連)産業として広く含んでよばれているようである。こういう意味での余暇産業の数年来の発展は、たんに掛け声だけでなく、色々の数字の上にも現われている。一例をあげれば、余暇産業に直接関係する家計支出費——娯楽・教養費・交際費・酒・飲料水費などの合計——は、昭和30年以降年を追って増大していることを経済企画庁あたりでは推計している。これらの余暇産業が、こんにちの「余暇」に重大な関係をもっていること

は、言うまでもない。

こういう産業的背景と、さきにみてきたような性格を内包するこんにちの「余暇」を、さらに一步ふみこんで検討しようとするとき、そこにどのような問題領域があり、どのような分析視覚が考えられてくるか、などについて以下でその概略をとりあげてみることにする。

I 余暇に対する人々の「態度」

1959年の夏に東大新聞研究所は、東京都内に居住する有権者を母集団として、「仕事と遊びに対する態度」についての調査を、別表のような「設問」による質問紙法で実施している。この調査は、人々の仕事もしくは労働に対する態度或いは余暇についての態度を、みる上で興味がある。

(別表)

- (1) 仕事をすることは、人間の義務であるから、時間のある限りは働かなければならない。
- (2) 仕事は仕事、遊びは遊びである。決められた時間はきちんと働くが、仕事から解放された時間は全く仕事のことは忘れて遊ぶ。
- (3) 仕事は食うための道具である。これは適当にやっておいて、できるだけ楽しく遊びたい。
- (4) 仕事は楽しみの一つである。別に仕事から解放されて遊びたいというようなことは考えたことがない。
- (5) 仕事は好きだが、仕事のためのエネルギーを養うため必要なだけの休養や遊びの時間が欲しい。
- (6) 人生はどうせ、あくせくしてもはじまらない。気ままにしたいことをしたらよいと思う。(1)

詳しい統計表もでていますが、煩雑をさけるため割愛するとして、統計データから得られることを若干要点的にとりあげてみる。

(イ) 設問(1)を「仕事は義務」型、(2)を仕事と遊びの「合理化」型内乃「割り切」型、(3)を食うための「仕事は道具」型、(4)を「仕事は楽しみ」型、(5)を「仕事のための遊び」型、(6)を「気まま」型とそれぞれ仮にいう。総数における割合の順位をみると、1位は「仕事は楽しみ」で断然高く(39.4%)、2位は(2)の「合理化」(20.8%)、3位は(1)の「仕事は義務」(18.8%)、4位は(5)の「仕事のための遊び」(12.4%)、5位は(3)(6)及びD. K.を含むグループ(8.7%)となっている。

(ロ) (1)の「仕事はつとめ」は年令の上昇に平行して直線的に増加している。職業階層別では、自営業主(中小企業管理者を含む)が大企業のホワイト・カラーより多い。

(イ) (4)の「仕事は楽しみ」も(1)と同様の傾向が、年令および職業階層別において現われている。そして(1)と(4)の合計が総数において、大半をしめていることは、充分注目されねばならない。

(ロ) (5)の「仕事のための遊び」は(4)のごとき職人氣質に共通するものを含んでいるとしても、余暇と労働の分離を必然とみて近代化されている。しかし乍らここでは「余暇」は、仕事のための踏み台であり、休息区間ということであって、これは自営業主や中小企業従事者を中心に高く現われている。

(ハ) (2)の「割りきり」「合理化」は(4)につづいて大きな比重をしめていることは、想像通りとはいえ、注目しなければならない。「余暇」はここでは積極的に承認され、それ自身独立の存在意義をもって来るに至る。そして年令別・階層別では、先にあげた(1)(4)とは全く正反対に若年層および大企業ホワイト・カラー労働者を中心としていること。ここにも現代の世相の一端がうかがわれるわけである。もう一つの問題は、仕事と遊びの合理的な「割り切り」が、両者の両極的な分裂を内包していることも、当然考えにいらておく必要があることである。

(ニ) 大雑把にいうと、(1)の「つとめ」型は旧中間層と50代、(2)と(5)の仕事と余暇のいわば「両立」型は新中間層と比較的に若年層、(3)の「仕事は手段」は20代と労働者層を中心としている。いづれにしても、これによってみて、「労働」と「余暇」に対する態度が、ある程度ははっきりと階層別、年令別に異なっていることが知られるのである。

Ⅱ 農村および低所得者層の余暇消費の型

東大新聞研究所の態度調査は、都市居住者を対象とするものであるが、こうした調査をわが国の低所得者層や農村などを対象にしてみたら、果してどういふ結果がでてくるだろうか。それはとも角として、これらの人口量は、わが国の大部分をしめるものであって、その実状を把握することは必要であろう。

元来農村などでは余暇日にあたる休日は、概して「祭り」の日でもあったし、祭りが休日や「あそび」と結びついていることは、今もそれほど大きな変りはないであろう。また、わが国の「ヒマ」ということばには、なにかそれを不道德視する匂いが含まれていると思うが、そのことは「余暇」あるいは「ヒマ」それ自体に、独立の意義が与えられていなかった農民や庶民の生活状態の反映であり、またそのような時代の名残りでもあろう。それともまた「霜をふんで家をで、星を仰いで家路に帰る」といった、一時代の道徳的勤儉スタイルに発するものでもあろう。たとえば「ヒマ人」「ヒマをやる」或いは「貧乏ヒマなし」などという言い廻しを、想い起して

みればよい。「ヒマのやり場に困る」という言いかたにしても元来なにか仕事をしたいにも、する仕事がない。することがなくて、そこだけポッカリあいた「ヒマ」をなにかすることで埋めることができずに、困惑している状態をいうものであろう。そこで、どうにしかたがなく、「ゴロ寝でもしよう」ということになる。——以上のことがらなどを念頭におきながら、これらの人々がこんにち日常経験する余暇消費の型をかりに考えてみると、ほぼつぎのようなものになるだろう。

(イ)「仕事」型余暇消費——本務の仕事が終ったあとでも、さらに副次的な仕事に「ヒマ」の時間をあてる。農村でのある種の「夜なべ」などは、多くこのなかに入ってくるだろう。

(ロ)「デモ」型余暇消費——不安定な低所得者層は、「焼酎の一パイデモ飲んで憂さをはらす」。あるいは「パチンコデモしに外に出掛ける」。余暇のすごしかたに就ての調査結果などによると、農村では「ゴロ寝などの休息」の項目は、「雑談」について第二位となっているのである。(2)

(ハ)「井戸端交際」型余暇消費——農村主婦などにおいては、テレビやラジオなどのマス・コミに次いで、「交際おしゃべり」の項目は余暇時間利用の面で、二位となっている。この型の余暇消費の特徴は、仕事の過程でのおつき合いというかたちをとって行なわれるところにある。主婦のお乳を含ませながらの添寝なども、タイプとしてはこの中に入るだろう。

(ニ)「マス・コミ」型余暇消費——マス・コミとくにテレビと都市農村を通じての家庭生活との関係、については別の拙稿でとり扱っているので割愛する。(3)あるてんからすると、テレビを中心とするマス・コミは、都市よりも却て農村を深く集中的に抱えているという事態もできているかも知れない。

(三)

Ⅲ 「対人関係」からみた余暇消費

余暇の領域は、たしかにある意味で人のプライベートな領域に属することであり、大げさに問題にせず、そおとしておくべき性質のものであろう。このことは、さきに余暇の古典中世的な観念にみられる基本的性格——静寂、孤独、沈思などとも関連してくる面である。しかしながら、こんにちわれわれが余暇において直面している問題は、個人のプライバシー領域を圧倒し、これを越えているてんにある。余暇の「組織化」が商業市場において、あるいは人間の集団管理などの立場から進行しつつある状態である。こういう事情を踏まえながら、余暇消費を(イ)独り型(例、読書、庭いぢりetc.) (ロ)グループ型(例、職場慰安旅行、サークル活動etc.) (ハ)家族

型（これにも外出型、滞留型などの別だけでなく、家族構成の違いや、その他の諸条件から色々の傾向を分析し得るであろう）(≡)不特定多数型（例、競馬やプロ野球の見物客etc.）などの諸形態に分類することができよう。そしてそれぞれの在りかたや、それら各型の内包する実質の推移傾向などについて、照明をあてていくことができるであろう。

Ⅲ 「行動面」からみた余暇消費

行動面からする余暇消費の形態としては、次のようなタイプに一応わけて考えてみるができるだろう。

(i) 「労働」あるいは「現実」からの逃避——苦しい、又ままたらぬ労働、現実から一時的に逃れるという意味合いをもつ。先述の通り、発展した資本主義の、とくに劣悪な労働諸条件のもとでは、労働そのものは「苦しみ」であり、余暇はそれからの「逃れ」となって現われる。労働と余暇はここでは併例的な区分以上の相互対立的な不調和音となる。こうした、ままたらぬ現実からの逃避行動としての余暇行動には、往々にして非合理的なかたちをとる場合が多く、しかもそれが集団的なかたちで現われたりもする。

(ii) 心身の緊張からの解放——これはレギュラーな労働生活過程でおきる緊張からくる心身の疲労を、そこにおいて休養させるという意味あいをもつ。各種のスポーツ・レクリエーションや慰安など、この面にあてはまる場合が多いだろう。

(iii) 教養的活動——個人的性格を基本とするもので、説明するまでもない。ただ、これには悪くすると内側の飾りとしての教養主義に墮する危険性をもはらんでいることをつけ加えておく。

(iv) 奉仕的創造的活動——ここで「奉仕的」というのは本務以外の第二次的な社会連帯的活動というほどの意味であり、「創造的」とは自己発展、自己充実という余暇行動の一つの理想的な形態をさすのであるが、しかし自己完結的なものでなく、社会の発展、充実をふまえたものである。すなわち(iii)の教養的といった個人的側面ではなく、個人を含めての社会の文化発展、幸福追求という社会的側面に強くかかわってくるものである。したがってそれは、社会の「変革」という側面に何らかの関係するものであり、単なる個人的良心や善意を満足させるという消極的性質にとどまるものでない。なお(ii)から(iii)ことにこの(iv)は、人々が余暇を活用する際の主体的基盤たるべき、内的生活態度の形成の問題についてあとでふれるとき、も一度とりあげられるものである。

以上あげた分類は、あくまで図式的なものであって、実際にはこれらが色々のかたちでミックスされることは断るまでもない。

V 基本的生活時間の分類からする余暇

さいごに基本的生活時間の分類から、余暇を割り出してくればどうなるか、これらの生活時間のあいだの関係如何という問題にふれたい。基本的生活時間としては、

- (1) 生理的生活時間（睡眠、食事、排泄など）
- (2) 社会的生活時間（職業上や家政上の生活時間を中心に、それに関連又は付随してくるものを含む）

以上、二つのものを差し引いた残余時間が「余暇」という生活時間になってくる。この場合の「余暇」は一番はじめにもふれたように生活を営むのに相応した生活費を稼ぎ、生理的諸生活を一応みたしたそのあとに残る時間ということが基本でなければならない。そして重要なことは、生理的生活時間と社会的生活時間の二つの内容的充実ということが、それらの時間の残余としての「余暇」の生活形式を充実させるための、前提条件であるということである。このことは、表食住に関する生理的生活時間の内容的充実なしに、余暇時間の充実をはかることが、いかに本末顛倒であるかを考えれば、容易にうなづけるであろう。こういう種類の倒錯現象が、われわれの周囲にみられることについては、別のところで少しふれた通りである。(4)それから生理的および社会的生活時間の能率化とか時間的短縮化ということは、それらの時間の残余としての「余暇」時間の量的延長化の前提をなす意味でも歓迎すべきことである。というのは、わが国の労働時間（10人以上製造業平均）は週平均ほぼ50時間という推計があるが、これは世界の主たる資本国のうちで最長である。こういう事態は、できるだけすみやかに改善されねばならない事は、余暇時間の問題からしても当面する課題である。ただし、量的なものによって凡てが解決されると安易に考えてはならない。労働時間の短縮は、同時に賃金はじめ労働条件の内容充実を伴わねば、積極的意味はうすくなる。最低賃金制の問題などはその手はじめにすぎない。余暇時間にしても同様である。たとえば、食事時間の長短に食事の内容を抜きにしては空疎であるのと、道理は同じである。余暇の「ゴロ寝」にしても、二通りあろう。生活条件が内容的に確保された上での、「ゆとり」のある短時間のゴロ寝もありうるし、そうでなくゴロ寝するしかほかにテがない「硬直」したゴロ寝もある。洗濯板が電機洗濯機にとって代り、電気冷蔵庫が登場するということは、先にあげた社会的生活時間の能率化や合理化というてんから大変結構なことであるが、これで以て一ぺんに家政上の問題が万事円満解決されるかのような錯覚に陥ってはいけないうる。

以上を総括しながら、生活時間としての余暇の「水準」をはかる尺度は何かということ、およびそれに関連して

くる一つの問題に最後にふれておく。

まづ余暇「水準」をはかる尺度であるが、これは要するにその第一の出発点は、生理的、社会的生活時間の内容の充実や合理化ということである。これは前提である。これを前提にして余暇の量的および質的問題に進まなければならない。余暇消費の量と質の問題は、切り離さず平行して考えねばならぬ性質のものであろうが、量的問題には少しふれたので、その内容質の問題、とくにこれに関連してくる問題にふれることにする。余暇生活の内容、ありかたという問題は、文化の問題として人間社会の遠い将来にもわたる問題をふくんでおり、生活の物質的基礎の問題が基本的に解決された暁においては、益々本質的な問題となってくることが予想される。だがしかし同時に、すでに述べたように受動化され、ムード化され、空洞化されつつある現実の余暇状況のもとにおいては、それは直面する極めて現実的な、それだけにまたこれを避けるわけにはいかない問題でもあると思われる。そうは言ってもしかし、この問題はどうしてもそれが人間の内的生活態度という主体の側面に結びついてくるものがあるだけに、ある意味で極めて困難な問題を孕んでいるように思う。というのは大衆の内的生活關心なり生活態度なるものは、現実の外的客観的諸状況によって隔々まで規定されておるからであり、さらに大衆の内的生活態度の形成内至変革ということは、それ自体が単なる政策的な問題領域以上のものであるからである。だがそれが複雑困難であるにしても、この問題に何らかの照明をあてないで素通りすることはできないように思はれる。なぜならばこの問題の核心は、われわれ自からの深い自己反省、自己批判ということに関係してくるからである。実はこのてんについては、考える余力を持ちあわせていない。しかし、今までのべたことを振り返りながら、これを自らを含めた大衆の内的生活態度の形成という問題にかかわらせて、メモ風に書きしるしておこう。

戦後わが国の国民大衆の、生活上の一種の欲求主義は敗戦ご大衆の前に正當にも解放された「自由」や、反時代的旧体制の束縛からの解放を基盤として出発するものであって、その限りでそれは肯定さるべきものであったことは争えない。しかし、その後の社会過程は周知の通りに過ぎてきた。長い占領と、それにつづく従属体制のもとでの独占資本の復活、発展であり、そしてこんにちの「所得倍増」「高度成長」であり、「消費時代」「レジャー時代」の到来となる。この流れは大衆にとって応接にいとまのない変化と圧力であった。このような大きないわば外圧によって、生活上の欲求主義はいつのまにか物質的感覚的な欲望主義となり、肥大化した消費欲求、ムード化した快楽主義となっていく。しかもこうした

一種の社会的性格は、大衆にとって、彼らが主体的に獲得したものであるよりは与えられたものであり、能動的な性質のものであるよりは受動的なものであったらう。

大衆の余暇は、こういう外力に刺戟され、育成された欲望主義によって、いつのまにか翻弄され侵蝕されるようになった。そしてそれがそのまま大衆の生活態度一少なくとも半ば肉体化された生活志向となっている。

そこでわれわれが余暇の質の問題、すなわち余暇に積極的にもられるべき内実の問題を考えようとするなら、まづ以てこうした生活志向、生活態度の一般化傾向に注目せざるを得ない。端的にいつて余暇の質の問題の第一歩は、こういう傾向への自己批判を避けてはならないということである。しからば、これに対置されるべき生活態度とは基本的にどのようなものであろうか。即ち大衆自らの自己省察に基づき自覚的に形成されるべき内的生活基準はどういうものであろうか。その実体は模糊として掴み得ないが、こういう内的生活態度の構造要因は、少なくとも次にあげる傾向性にきびしく対立し、これを排除するものであることだけは言えそうである。

- (イ) 反時代主義、復旧主義
- (ロ) 非合理主義、感覚的情緒主義
- (ハ) 外の飾りとしての消費主義、内の飾りとしての教養主義、及び観相主義。

なお敢えてこれを、おもてから言えば、先にあげた「奉仕的創造的活動」という行動型などは、一つの構造要因たりうるであろうし、また一貫した禁欲的積極主義や目的合理的な大衆連帯主義なども欠くことはできないであろう。いづれにしてもこのようなある意味できびしい内的生活態度を、大衆自からが主体的に設定しようと自覚化することが、その余暇問題を適切に解決するための条件であると思われる。

(註)

- (1) 岡部慶三「娯楽志向と生活様式の変化」「思想」431号 P54以下
- (2) 経済企画庁編「消費と貯蓄の動向」1961年版
- (4) 拙稿「テレビ視聴と家庭生活の諸問題」愛知県医療社会事業協会機関誌「医療社会事業」第15号所載
- (3) 前掲拙稿

C 余暇の組織化

(一)

すでにふれたように、余暇はプライバシーの側面をたしかにもつが、しかしこんにち余暇の組織化という事態を迎えていることは争えない。各種の余暇産業はもちろ

ん、余業経営体や国家、地方公共機関、マス・コミあるいは職場や地域などにおける自発的集団または労働組合などによって、とりあげられつつある。ここではこれら凡てにふれる余裕もないので、経営企業体における余暇の組織化状況を中心に、かんたんにみていくことにする。

「余暇」と「労働」は本来、ともに他を支えながら人間の自己充実をもたらすべきものであると思われるが、これが分裂しきっていることはみてきた通りである。ところでこういう分裂の、極端な進行を見棄ておくことの不得策な所以については、企業経営体はすでに理解し、見抜いてきたと言える。ここに経営による労働者の余暇の管理、組織化の方策が生じてくる。比較的新らしいものとしては、例のヒューマン・リレーションの問題が注目され、それが経営の場でとりあげられるに至ることなどがそれである。その具体的な形態として社内報、提案制度、カウンセリング、家族工場見学、ホームヘルパー制度、レクリエーション大会など、多彩である。けれども企業における余暇管理方式としては、わが国では経営内の福利厚生施設、機能を通してのそれが、これまでずっと中心をなしてきたのである。明治30年代以来の企業内共済組合や福利厚生施設の伝統は、一貫して労資の情誼、事業一家の精神主義、慈恵思想を特徴としてきた。そしてそれが、低賃金の補完的な役目と、従業員の企業意識、わが社意識の養成や労働組合対策の意味を有してきたことなどについては、わが国の社会政策史をみれば容易に首肯されるところである。労務管理のこのような古い伝統的性格は、さまざまなかたちでこんにちにまで引き継がれてきている。企業体によるこんにちの余暇管理をみていく場合にも、このような背景を充分考慮してかかる必要があるだろう。

ここ数年来、会社寮や社員住宅、山の家や海の家などの建設が目立つようになっただけでなく、体育、スポーツ施設方面も盛んであるといわれる。そしてこれらの立派な諸施設から便益をうける側の労働者の負担は、おしなべて甚だ格安である。労働者にとって、それらが大きな魅力であることは当然であろう。ただこういう完備した近代的施設を誇りうるのは、大企業またはその健康保険組合なり共済組合だけであるといつて過言ではない。中小企業以下にあっては、こういう施設がたとえあってもお粗末になることは目に見えている。つまり大企業と中小企業以下の間には、賃金その他の格差があるだけではない。こういう福利厚生施設面やその他の社会保険の給付面、ついでに言えば保険金負担面などに及ぶ格差が生じている。大企業関係では、保育所や食堂、売店その他の保養慰安施設など、といういわば嘗ての福利厚生施設の時代は過ぎて、企業側の今後の動向としては立派な文化

体育施設の増強が見込まれ、これらの及ぼす効果に期待がかけられている様子が、調査結果などに徴してもうかがわれるが、(「労働問題」54号、P30以下参照)ここにもあらたな余暇管理の方向が示唆されているわけである。

また人間関係の改善方策に注意が払われてきたことはさきにあげた人事相談制度、ホーム・ヘルパー制度、家族工場見学や誕生会などの採用に現われている。こういう方向は、たんに職場内の労働者の管理にとどまらず、その家族をふくめてのいわば「生活管理」というかたちをとりつつあると考えることができる。そしてこれは同時に、従業員のみならずその家族の「余暇時間の管理」という傾向であるともみられる。こういう方向でもって「労働」と「余暇」との基本的な諸矛盾を解消しることができるとみるのは誤りであろう。がしかし現実にかかる諸施設機能から多くの便益をうけている労働者とその家族にとっては、つぎのようなわが国の事情を考慮するとき、これら施設機能の存在は無視し去ることはできない。すなわち (1)国民大半の生活水準がまだ一般に低くかつ社会保障の制度的欠陥や内容上の不備などのために大企業におけるこれらの福利厚生の機能がそれだけ目立つというだけでなく、現実これが賃金その他の生活諸条件の補完的な支えになっていること。(2)企業経営の規模に応じて、これらの機能には極めて大きな格差があるということ。全般的にみて、こうした施設機能から完全にとり残されている小規模経営内の労働者や庶民、農民など大量の人口が存在するという事情である。

(二)

マス・メディアによる余暇の組織化は別のところでもとりあげたのでふれないとして、(前掲拙稿)ただ日曜と週日を平均しての余暇平均時間——5.8時間のうち、マス・メディアの接触時間が3.2時間——すなわち人々の平均余暇時間の半ば以上をしめるという統計があることだけを指摘しておく。つぎに諸種のスポーツ、遊興諸施設など余暇産業施設の利用状況については、しかるべき場所へしかるべき時刻に出向けば直ちに判明する通りである。たとえば、ある特定の興業スポーツ一つをとってみて、その直接現場動員人口の年間統計数値を調べただけで、ほぼその偉力の一端がうかがわれるだろう。国家公共機関による余暇の組織化としては、諸種の社会教育的活動分野をはじめとして国立公園の開発、国民宿舎や国民休暇村などの構想にうかがわれるのであって、これらの施設活動はまた余暇企業体の諸活動を励まし、あるいはこれと相互支援しあうかたちをとりながら進められている。

さいごに労組や職場あるいは地域を中心とする各種のサークル活動、その他の余暇の組織化の問題が残ってい

る。この問題はそれ自体、今後の一つの重要な問題であると思われるので、稿を改めて考えてみたい。ただし、これら組織労働者をはじめとする勤労大衆が自主的余暇活動にとりくむに際し考えなければならない問題として、一つだけいっておきたい。それは先に述べた戦後の余暇状況の推移過程に対する反省ということである。つまりこの状況に受けみで対応しつつある間に、いつし

か無自覚のうちに形成されてきたところの、自らを含めての大衆の生活志向のある種の傾向についてである。これに対する自省と、さらには大衆自からによる内的生活態度の自己形成という問題であって、これは勤労大衆にとって一つの「身構え」の問題であり、余暇の問題に対処するさいの前提をなすものでないかと思うのである。

（以 上）